

9 days Queen と呼ばれるイギリス最初の女王、レディ・ジェーン・グレイ。私は今、彼女や彼女の生きた時代に大きな関心を持っています。

彼女は、十六世紀のイギリスに生まれ厳格なプロテスタントとして育ちました。他の王族の女性達と共に貴族としての様々な教育を受け、高度な学問を身に付けました。政争に巻き込まれて政略結婚をさせられ、自身の意思に反し女王になりました。しかし彼女を女王に即位させた大人達の画策が失敗に終わり、在位たったの九日でロンドン塔にて処刑されてしまいました。

私が今彼女について関心を持っている理由は、彼女を主人公とした演劇作品が上演される事を知り、観劇したからです。作品は虚構なので史実とは異なる部分もありましたが、大方は史実に沿ってお話が進んでいきました。彼女は十六歳で処刑されてしまいましたが、政争に巻き込まれたに過ぎないため、カトリックだった次の女王メアリーはプロテスタントからの改宗を条件に命を助けると言っていました。ですがジェーンはこれを拒否し自ら処刑される道を選んだのです。この尊厳なき生よりも尊厳ある死を選ぶという生き方、最後まで信念を持ち続ける生き方がこのお話の最大の見所であり、柱となっていました。

劇中には色々な人がいました。中でもメアリーの次の女王エリザベスは「私なら信念を曲げてでも生き続ける。」と言いました。ジェーンとは逆に、生きることを最も大切にしたのです。確かに人は生きてこそ人としていられます。ですから信念を守るために死ぬよりも生きてそこで意味を見出す方が良いと考えるのが普通でしょう。実際、私にも生き続けるという事しか考えられません。では何故彼女はあの様な選択をしたのか。想像するしかありませんが、彼女は人を大切にしていたのだと思います。

「人を大切にしていた」とはどのようなことでしょうか。簡単に言えば他人も自分も大切にしていたということではないかと思えます。ジェーンは、他人に対しては誰かを恨むことをしませんでした。自分に対しては自分の意思を貫き通しました。彼女は今まで大人達に利用され自分の意思を持つことができず、自分の存在というものは無いも同然でした。そんな彼女が自分を大切にし、唯一自分の意思で決めたことが処刑ということだったのです。

劇中では「魂の不滅」という言葉が何度も出てきました。彼女は初め、この言葉を信じられていませんでした。しかし最終的にはこれを信じ、処刑される事への恐れを拭おうとしていたようでした。

それにより肉体と魂が別という解釈をするなら、ジェーンの魂がこのお話を通して私が今生きていることは幸せだということを伝えているのではないかと思えます。毎日学校に通って勉強ができ、好きな事もできているのが本当に恵まれているということ。彼女と生きた時代や場所や地位等が違っていても、心に留め日々感謝すべきだと改めて感じました。また国や権力等、力を欲しがると人は目の前しか見ていなかったのではないかと思えます。考えてみれば、周りには自然や時間等人間の尺度を超越する物ばかりです。ですから、私は何かを考えたりする時は目の前だけでなくもっと視野を広く、先を見るのが大切だと思えました。

最後に、私は人を大切にすることを心がける様にしたいです。当たり前ではありますが、他人に対しては敬意を払い、相手の事を考え、自分に対しては毎日を大切に懸命に生きるのが 9 days Queen レディ・ジェーン・グレイに教えられたことの結論です。